

Title	新出土資料関係文献提要 (十二)
Author(s)	椋島, 雅弘
Citation	中国研究集刊. 2014, 58, p. 155-164
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58728
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

新出土資料関係文献提要（十二）

椋島雅弘

本提要は、『中国研究集刊』崗号（総五十四号）に掲載された「新出土資料関係文献提要（十一）」の続編である。今回は、二〇一二年から二〇一三年までに発行されたものを中心とした。以下、「原積文」「研究書（中文書）」「研究書（和書）」の三つに分類する。

原積文

『岳麓書院藏秦簡（貳）』（朱漢民・陳松長主編、上海辞書出版社、二〇一二年十二月、一九六頁（別冊拡大図版五十八頁）、縦組繁体字（附録「放大本」のみ横組））

岳麓書院藏秦簡（岳麓秦簡）の図版と積文とを収載し

た書。本書はその第二分冊にあたる。原寸大カラー図版と原寸大赤外線図版の二部構成となっている。カラー図版には、各竹簡の正面画像と積文が、赤外線図版には、各竹簡の正面・背面画像と積文・注釈がそれぞれ附されている。

本書には、『数』が収録されている。『数』は計二二六簡（その他、十八枚の残簡あり。）原積文者は蕭燦氏。完簡の長さは約二十七・五センチ、幅約〇・五〇・六センチ。三道編綫。『数』には、「租税類算題」「面積類算題」「宮軍之術」「合分与余分」「衡制」「穀物換算類算題」「衰分類算題」「少広類算題」「体積類算題」「贏不足類算題」「句股算題」等に関する記述が存在する。

『数』の成立年代の下限は、同時に出土した『為獄等状四種』（第三分冊に収録）の判例記録から、秦の始皇

帝三十五年（紀元前二二二年）と推測されている。『数』の算題の中には、『数』特有のものや、張家山漢簡『算数書』や『九章算術』にも見える算題が含まれる。

『数』の発見は、中国古代における数学を明らかにする手がかりとなるばかりでなく、特に秦代に用いられた実用的算術法に関する貴重な情報を提供すると考えられている。また、秦代の政治、経済、法律、軍事等に関する研究を進める上で、重要な資料であるとされている。

なお、本書の巻末には、『数』の積文のみを連続筆写した「積文連読本」、本書に使用されている「L」「a」などの記号について解説した「《数》簡的表徴測量示意图及説明」、各竹簡の形制をまとめた「各枚簡的表徴測量拋及字数記録表」、整理前の竹簡状況の写真・竹簡配列図を掲載した「《数》簡掲取前的簡序位置図」が見える。また、別冊として拡大図版が附されている。

『岳麓書院藏秦簡〔参〕』（朱漢民・陳松長主編、上海辞書出版社、二〇一三年六月、三五八頁（別冊拡大図版六十四頁）、縦組繁体字（附録「放大本」のみ横組））

岳麓書院藏秦簡（岳麓秦簡）の図版と積文とを収載し

た書。本書はその第三分冊にあたる。原寸大カラー図版と原寸大赤外線図版の二部構成となっている。カラー図版には、各竹簡の正面画像と積文が、赤外線図版には、各竹簡の正面・背面画像と積文・注釈がそれぞれ附されている。

整理者は陶安氏。本書には竹簡の他、木簡が含まれ、主に秦王政（始皇帝）時代の司法文書が収められる。本書所収の秦簡は、内容・材質・書体から四つに分類され、原書の標題である「為獄詔状」に拠って『為獄等状四種』と命名された。またその他「待考残簡」を含めて、計五つに分類される。全二五二簡（綴合後の竹簡・木簡も含む）。

第一類は、計一三六枚、全体の二分の一以上を占める。材質は竹で、保存状態は比較的良好である。簡長は二十七・四〜二十七・五センチ、幅〇・六〜〇・七センチ、三道編綫。竹簡には、竹簡中央の墨点、竹簡右側の墨鉤、計二種類の句読点が使用される。書風はほぼ一致しており、同一人物が筆写したことが予測される。内容は、「癸・瑣相移謀購案」「尸等捕盜疑購案」「猩・敏知盜分贓案」「芮盜売公列地案」「多小未能与謀案」「暨過誤失坐官案」「識劫嬖案」の七種に分類される。年代が明らかかな判例は、すべて秦王政十八年から二十五年の間

のものであり、秦が中華統一する以前に書写されたことがわかる。

第二类は、計七十三枚、材質は竹で、保存状態は残簡が多くあまり良好ではない。簡長は、約二十五センチ、幅〇・五〇・六センチ、三道編綫。第二类の竹簡形制や書風が、第一類と異なっているため、それぞれ別の人物によって書写されたことが予想される。内容は、「誦・妬刑殺人等案」「同・顕盜殺人案」「鬻盜殺安・宜等案」「得之強与棄妻奸案」「田与市和奸案」「善等去作所案」の六種に分類される。年代が明らかでない判例を見ると、秦が中華統一する以前のもものと統一後のものが混在するが、いずれも嬴政の在位期間に成立したものと推測される。

第三類は、計二十七枚、保存状態は比較的良好である。第四類は、計九枚、保存状態はあまり良好ではない。両類の簡長は非常に類似しており、それぞれの簡長は約二十二・九センチ、両道編綫。しかし、両類の材質・幅・書風は異なっている。

第三類の材質は木で、幅約〇・八センチ、書風は粗放で、内容は、「学為偽書案」の一種である。判例記録によれば、成立年代は秦王政二十二年である。第四類の材質は竹で、幅〇・六センチ、書風は第一類と比較的類似

している。内容は、「綰等畏栗還走案」である。

第五類は、計七枚ですべて残簡。第一類から第四類までに分類することができないものを「待考」として第五類に分類している。

『為獄等状四種』は、しばしば張家山漢簡『奏讞書』と類似する内容を含み、両者の継承関係が注目される。

なお、本書の巻末には、各案件の日時・場所・人物・内容等を表にして整理した「文書層次表」、その表に引用されている本文を「語訳」したもの、竹簡の背面写真や、整理前の竹簡状況の写真・竹簡配列図、各竹簡の形制をまとめた表等を含む「簡序驗証資料」が見える。また、別冊として拡大図版が附されている。

『北京大學藏西漢楚竹書(貳)』(北京大學出土文獻研究所編、上海古籍出版社、二〇一二年十二月、二三五頁、縦組繁体字)

北京大學藏西漢竹書(北大漢簡)の図版(写真版)と釈文考釈とを収載した書。全約三三〇〇簡を収録予定で、本書はその第二分冊にあたる。図版は、合計七分冊(もしくは八分冊)に分けて出版される予定であり、第

二分冊には『老子』が収録されている。

北大漢簡『老子』の整理者は韓巍氏。計二八一枚、うち一七六枚が完簡で、一〇五枚が残簡である。簡長は三十一・九〜三十二・二センチ、幅〇・八〜〇・九センチ、三道編綫、契口が存在する（右契口）。満写簡には二十八字（希に二十九字）筆写されている。また、竹簡背面には劃痕が見える。書体は大変優れており、前漢中期の隸書体であると推測される。

竹簡の欠損率は、全体の一パーセント以下であり、馬王堆帛書『老子』甲本・乙本、郭店楚簡『老子』に比べて現存状態が大変良好である。よって、今後『老子』校勘はもちろん、『老子』研究を進める際の貴重な資料になるとされる。

北大漢簡『老子』は、上下二篇に分かれている。「老子上経」「老子下経」の篇題が竹簡背面に明記されており、それぞれ現行本の「徳経」「道経」に対応する。これは、現行本が「道経」「徳経」という順番であるのとは逆である。また、馬王堆乙本にも同じ現象（「徳」「道」という表記）が見られる。また、分章や文字についても各本との相違が見られる。

なお巻末には、竹簡形制をまとめた「西漢竹書《老子》竹簡一覽表」、『老子』の伝世本・北京本を含めた出

土本を章ごとに表にまとめた「《老子》主要版本全文对照表」、北京本『老子』の特徴について言及した「西漢竹書《老子》の文本特徴と学術価値」、竹簡背面に存在する劃痕について考察した「西漢竹書《老子》簡背劃痕の初歩分析」が見える。また、北京本『老子』の全体図（両面）を表す別冊附録が見える。

『清華大学蔵戦国竹簡（肆）』（清華大学出土文献研究与保護中心編・李学勤主編、中西書局、二〇一三年十二月、二〇二頁、縦組繁体字）

清華大学蔵戦国竹簡（清華簡）の図版と釈文とを収載した書。本書はその第四分冊にあたる。上下二冊からなり、上冊にはカラーの原寸大図版・拡大図版が収められ、下冊には釈文・注釈が収められている。本書には、『筮法』『別卦』『算表』の三篇が収録されている。

『筮法』の整理者は李学勤氏。竹簡の保存状態は良好で、入手時点では大部分が巻かれた状態であった。簡長は三十五センチ、計六十三枚、篇題は無く、内容から「筮法」と名付けられた。竹簡正面下部に配列番号が、竹簡背面に劃痕がそれぞれ見える。内容は、占筮の原理

と方法について記述されており、「数字卦」によって表れた占例を大量に含む。卦を数字で表すという形式は、天星觀楚簡・包山楚簡・新蔡葛陵楚簡に見える占筮記録と同一である。釈文は、占筮の内容ごとに計三十節に分かれている。『筮法』の文字は分欄筆写（竹簡の下まで書き終わらずに次の竹簡に書写する形式）され、また挿絵・図表が見られる。そして、それらの形式は馬王堆帛書に類似する。『筮法』は、先秦の三易研究に重要な手がかりを提供するものとして注目される。なお、釈文の後に「《筮法》掲取前照片」「《筮法》掲取示意图（截面）」『筮法』掲取説明」が附されている。

『別卦』の整理者は趙平安氏。全七枚、簡長は十六センチ、幅一・一センチ、両道編綫。内容は、卦象と卦名であり、一簡あたり八つの卦名が見え、合計で六十四卦存在していたことが推測される。（竹簡が一本分脱しているため、現存するのは五十六卦）馬王堆帛書『周易』と同一系統から出たものだと推測され、易学の習慣に基づいて、暫定的に『別卦』と名付けられた。『別卦』は、『周易』の卦象・卦名・卦序及び経卦の変容について研究する上で価値を有するものとされている。

『算表』の整理者は馮立昇氏。計二十一枚、入手時点で既に竹簡はまとまった状態ではなく、整理者が形制・

内容によって再配列を行い、整えられた。篇題は無く、内容と機能から「算表」と名付けられた。簡長は四十三・五〇四十三・七センチ、幅約一・二センチ、厚さ〇・一三センチ、三道編綫。竹簡背面には劃痕が見られる。『算表』は、二分の一、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、二十、三十、四十、五十、六十、七十、八十、九十のうち、二つの数字を掛け合わせた数字を示す乗算表である。『算表』によって計算できる数字の最小値は四分の一であり、最大は八千一百である。『算表』は、十進法が見える文献の中で最古であるだけでなく、里耶秦簡・張家山漢簡「九九乘法表」等の乘法表と比べても高度な計算機能であり、中国先秦数学の発展と普及について研究する際、重要な資料を提供するものとして注目される。なお、釈文の後に「《算表》結構示意图」が附されている。また、巻末には「字形表」「竹簡信息表」が、別冊で『筮法』『算表』の全体図を表す「附図」四枚がそれぞれ附されている。

『中国出土文献研究——上博楚簡與銀雀山漢簡』（湯淺邦弘著、台湾・花木蘭文化出版社、二〇一二年九月、全一五七頁、横組繁体字）

上博楚簡・銀雀山漢簡に関する研究書。「上博楚簡儒家系統文献研究」「上博楚簡楚王故事文献研究」「銀雀山漢墓竹簡研究」の三部構成であり、他「日本の中国出土文献研究現状及課題」を附す。

「上博楚簡儒家系統文献研究」では、上博楚簡の中でも儒家との関わりが深い文献を取り上げて考察する。第一章では、『三徳』を取り上げ、その全体構造・文献的性格を明らかにした後、第二章において、主に『三徳』に見える天人相関思想に注目し、検討する。第三章では、『季康子問於孔子』『君子爲禮』『弟子問』の主題である「君子」の意味について考察する。第四章では、『顔淵問於孔子』を取り上げ、文献中に見える思想と『論語』等の儒家系伝世文献に見える思想を比較検討することにより、先秦の儒家系文献の形成過程について考察する。

「上博楚簡楚王故事文献研究」では、上博楚簡の中で

も楚王に関する故事を取り上げて考察する。第五章では『莊王既成』、第六章では『平王與王子木』、第七章では『平王問鄭寿』、第八章では『君人者何必安哉』をそれぞれ取り上げ、基礎的な分析を行う。そして、これらの文献が、楚国における太子教育のための教戒書であった可能性を指摘する。

「銀雀山漢墓竹簡研究」では、銀雀山漢簡「論政論兵之類」五十篇を取り上げて考察する。第九章では、「論政論兵之類」の中でも、篇題木牘に記されている十二篇を取り上げ、それらの体系性・成立時期・思想的特質を考察する。第十章では、「論政論兵之類」の一篇である「起師」を取り上げ、特に興軍の時節という問題に注目し、『孫子』等に見える関連記述と比較検討することにより、「起師」の特色・意義を明らかにする。第十一章では、「論政論兵之類」の一篇である「将義」を取り上げ、特にその將軍論に注目し、『孫子』等の関連記述と比較検討することにより、「将義」の特色を明らかにする。

本書は、新出土文献のうち、儒家系文献・兵家系文献を検討することにより、儒家・兵家の研究に新たな視点を提供した点と、楚王故事を検討することにより、これまで僅かに『国語』『左伝』に伝わっていた春秋時代の

王者の故事について、より明らかにした点に特色がある。

『清華簡研究』第一輯（清華大学出土文献研究与保護中心編、中西書局、二〇一二年十二月、三九二頁、横組繁体字）

二〇一一年六月二十七～二十九日に開催された「清華大学蔵戦国竹簡（壹）」国際学術研討会」の後に出版された論文集。

論文は、邢文「試釈清華簡《尹至》的『勿遺』」「美」柯鶴立「清華簡《保訓》中的『訓』及古代伝播『訓』的方式」〔日〕浅野裕一「清華簡《楚居》初探」李零「読清華簡筆記・鹵与竊」李銳「由近年出土文献論《尚書序》的有關問題」等、計四十四本収録されている。

なお本書の巻末には、研討会の様子を記した、袁金平「《清華大学蔵戦国竹簡（壹）》国際学術研討会紀要」孫飛燕「《清華大学蔵戦国竹簡（壹）》国際学術研討会綜述」と、研討会のプログラムである「《清華大学蔵戦国竹簡（壹）》国際学術研討会會議日程」が附されている。

『初識清華簡』（李学勤著、中西書局、二〇一三年六月、二一〇頁、横組繁体字）

著者による清華簡研究の成果を収載した書。全三十六篇。各篇はおおよそ発表した順序で掲載されている。

収録されている論考のうち、『保訓』に関するものが四篇、『著夜』に関するものが二篇、『祭公之顧命』に関するものが一篇、『金縢』に関するものが二篇、『楚居』に関するものが二篇、『繫年』に関するものが十篇、『説命』に関するものが一篇、『周公之琴舞』に関するものが三篇、『算表』に関するものが一篇であり、『繫年』に最も注目していることがわかる。

また、「清華簡九篇綜述」「清華簡與《尚書》、《逸周書》的研究」等、包括的な視点で論じられたものが五篇、竹簡整理に関する報告類が二篇、その他三篇で本書は構成される。

本書の特徴として、竹簡整理に関する報告が収録されていることが挙げられる。著者は、清華簡の整理・編集を行う「出土文献研究与保護中心」のセンター長であり、清華簡を入手してから図版を出版するまでの、詳細な情報を知ることができる。

『竹簡が語る古代中国思想(三)——上博楚簡研究——』

(浅野裕一編、汲古選書、二〇一〇年三月、四二二頁、縦組和文)

上博楚簡に関する研究書。「戦国楚簡研究会」の共同研究の成果である。著者は、浅野裕一氏、湯浅邦弘氏、福田哲之氏、福田一也氏、草野友子氏の計五名である。全十二章、附篇一篇で構成される。

第一章「上博楚簡『東大王泊旱』の災異思想」では、『東大王泊旱』に見える災異思想に注目し、地域性を踏まえつつ、その特色を明らかにする。

第二章から第四章までは、『凡物流形』を取り上げる。まず第二章で「上博楚簡『凡物流形』の全体構成」で『凡物流形』を釈読し、『凡物流形』は《問物》と《識一》の二つの文献であることを指摘する。そして第三章「苗族創世歌と上博楚簡『凡物流形』《問物》——『楚辞』天問の淵源——」で、『凡物流形』《問物》部分を取り上げ、体裁・内容が類似する苗族創世歌と『楚辞』天問をそれぞれ比較検討を行う。そして、『問物』の成立年代は、苗族創世歌と『楚辞』天問の間に位置することを指

摘する。第四章「上博楚簡『凡物流形』《識一》の道家思想」では、『凡物流形』《識一》部分を取り上げ、『識一』にみえる宇宙生成論・唯心主義的傾向について、他文献と比較しながら検討する。また、『識一』が『老子』より成立が先行する可能性を指摘する。

第五章から第七章では、上博楚簡に含まれる楚王故事を取り上げる。第五章「警戒書としての『君人者何必安哉』」では、『君人者何必安哉』を取り上げ、その思想的特質と楚王故事としての特徴を明らかにする。第六章「別筆と課題——上博(六)所収楚王故事四章の編成——」では、『莊王既成 申公臣靈王』『平王問鄭寿』『平王与王子木』の編聯問題について、竹簡形制および字体という観点から検証する。第七章「上海博物館藏戦国楚竹書の特異性——『君人者何必安哉』(乙本・甲本)を中心に——」では、『君人者何必安哉』の甲本・乙本の字体に注目し、甲乙両本が、同一の親本にもとづく「習字簡」である可能性を指摘する。

第八章「『大戴礼記』武王踐阼篇の成立——上博楚簡『武王踐阼』を手掛かりとして——」では、上博楚簡『武王踐阼』甲本・乙本を手がかりに、現在通行する『大戴礼記』武王踐阼篇の編纂過程について考察する。

第九章および第十章では、再び上博楚簡に含まれる楚

王故事を取り上げる。第九章「中国古代における王の呼称―上博楚簡『鄭子家喪』を中心として―」では、楚王故事の中で、「王」と「君王」の呼称が同時に見えることに注目し、両者が意図的に使い分けられていたことを指摘する。第十章「上博楚簡『申公臣靈王』の全体構造」では、『申公臣靈王』を取り上げ、『左伝』と対照しながら、その全体構造を明らかにする。

第十一章「儒家による『易』の經典化」では、新出土文献にみえる『易』関連の記述および、馬王堆帛書『周易』・上博楚簡『周易』を踏まえ、『易』の成立が、秦初以前であったことを指摘する。また『易』の經典化が、儒家の中でも『易』を信奉する一派によって為されたことを明らかにする。

第十二章「新出土文献と思想史の書き換え―日本における先秦思想史研究―」では、先秦思想史研究において、新出土文献がもたらす影響がどのようであるか総括的に述べる。また、新出土文献の日本における研究状況について紹介する。

附篇「楚墓郭室材に対する炭素14年代測定結果の紹介」では、新出土資料の成立年代を推測する上で有力な手がかりとなる炭素14年代測定について、紹介する。

本書は、日本国内において上博楚簡第七分冊収録の文

献をいち早く取り上げ、研究成果をまとめている点に特色がある。また、日本の新出土資料研究の状況を紹介しており、先秦思想史と新出土文献を概観する際に有用である。

『出土文献から見た古史と儒家經典』（浅野裕一・小沢賢二著、汲古書院、二〇一二年八月、四六八頁、縦組和文（第九章・第十章・第十一章のみ横組和文））

出土資料を用いて、古代史書・儒家經典について再考した書。全十一章で構成される。第一章から第七章までは浅野裕一氏、第八章から第十一章までは小沢賢二氏がそれぞれ執筆を担当している。

第一章から第三章までは、出土資料中の史書としての性格を持つ文献を取り上げ考察する。第一章「清華簡『楚居』初探」では、『楚居』を取り上げ、楚の始祖と殷王・盤庚との婚姻関係が語られていることや、楚人が自身を「楚人」と称していること等、『楚居』がもたらす新知見を五つ紹介する。第二章「上博楚簡『王居』の復原と解釈」では、『王居』を取り上げ、『王居』に登場する楚王が恵王であることや、『王居』の著述意図を明らか

かにする。第三章「史書としての清華簡『繫年』の性格」では、『繫年』を取り上げ、『繫年』が先行する史書から材料を選別・抽出して主題別に編集し、それを時代順に配列した史書であるとの見解を示す。

第四章から第七章では、思想的な観点から、出土資料によって得た知見を活用しつつ、儒家經典について再考する。第四章「『大学』の著作意図―『大学之道』再考―」では、『大学』の著作意図は、孔子が「素王」であることを暗示することであったことを指摘する。第五章「孔子の弁明―帛書易伝『要』篇の意図―」では、帛書易伝「要」篇を検討し、「要」篇の著作意図は、『易』經典化に反対する勢力の批判を封じることであったと推測する。第六章「五十歳の孔子―『知天命』と『格物致知』―」では、『論語』為政篇にみえる「五十而知天命」は、孔子の願望が叶わなかったことへの自己救済のため「天」を語った記述の一つであることを指摘する。第七章「論『論語』」では、『論語』の「論」とは、元々「論」（竹簡を集めてきて順序立てて編集する）という意味であったことを指摘する。

第八章から第十一章では、天文・暦法・音韻学・書誌学・古文書学等、様々な観点から、出土資料によって得た知見を活用しつつ、古代史書・儒家經典について再考

する。第八章「清華簡『尚書』文体考」では、今文『尚書』に見える特殊な成語・定型句等を手がかりに、主文体という観点から清華簡『尹至』『保訓』『金縢』を分析する。第九章「中国古代における文書の成立と『尚書』の位置」では、金文資料を用いて、西周時代における文書形式の変遷と正書法のシステムを明らかにする。第十章「中国古代における編年史料の系譜」では、清華簡『繫年』に加え、『古本竹書紀年』『春秋』『左伝』を、天文暦法・音韻学・文書学の観点から分析する。第十一章「カールグレン『左伝真偽考』への軌跡」では、カールグレンの主張した「原始漢語Ⅱ屈折語（語形が変化する言語）」説について、言語学の視点から批判を行う。また、清華簡等の出土資料を踏まえ、原始漢語における人称代名詞について考察する。

本書は、思想史だけでなく、天文・暦法・音韻学・書誌学・古文書学等、様々な観点から、古代史書と儒家經典にアプローチしている点に特徴がある。